

大宰府アカデミー・令和編 第18講 令和6年9月18日(水)質問及び回答(Q&A)

「幕末・維新期の太宰府～五卿の警衛・応接と志士の周旋～」

講師・回答： 竹川 克幸先生(日本経済大学経済学科教授)

この度は大宰府アカデミー・令和編を受講いただき誠にありがとうございます。

皆様からいただきましたご質問につきまして回答いたします。

なお、ご質問につきましては、抜粋して掲載しておりますことをご了承ください。

Q/ 講義の中で、幾度か「文章経国」あるいは「和魂漢才」について言及がありました。この時期、薩長は清国がアヘン戦争などにより半植民地へと転落していく様を把握しており、かつ下関戦争・薩英戦争という直接対決や情報収集などからも、東アジア世界に対する欧米の優位を痛感していたと思われます。こうした状況下で「漢」才を主張したのはどのような人々でしょうか。

A/ 回答

「和魂漢才」は日本固有の精神である「大和心」・「和魂」の継承と中国から渡来した東洋の学問や文化「漢才」との融合、他国の文化受容を意味し、明治維新後は「和魂洋才」へと変化します。幕末期に「和魂漢才」を提唱、宣伝した人々は 国学者平田篤胤、弟子の平田鏡胤、鈴木重胤や大国隆正らの影響を受けた平田国学派の人々です。平田国学派の影響を受けた人々は、国学者、漢学者、医者、神官、文人、商人などで、その多くが尊王攘夷派の志士として活動します。彼らは、「文祖至誠の神、天神様・菅原道真公」を崇敬し、日本の伝統「和魂・国風」を失わず、「漢才」の文化教養への精通を理想としていました。

安政5（1858）年、太宰府天満宮第35代別当の大鳥居信全の発願、菅原為定の揮毫で、松屋・栗原孫兵衛や和泉屋（泉屋）惣兵衛ら「和魂漢才石碑寄進集中」を世話人・発起人に、下関の勤王商人の白石正一郎をはじめ筑前、羽州、奥州、江都、長州など全国各地の平田国学派の同志や天満宮の講社中など百十余人に寄進・寄附を募り、太宰府天満宮の境内に「和魂漢才碑」を建立します。この「和魂漢才碑」の建立を企画・提案、周旋した人々の中には、竹内五百都（葛城彦一）、北条右門（村山松根）ら筑前へ脱藩・亡命した薩摩藩士もいます。

また、西郷隆盛の同志で、京都清水寺の勤王僧・月照は、九州・薩摩落ちの途中で太宰府天満宮を訪れた際に「赤心報国の人々、和魂漢才碑を立つると聞いて しきしまや大和心のひとすぢに いとかしこくも立つる石ぶみ」という和歌を詠んでいます。

Q/ 五卿の立ち位置について教えてください。幕府の側からみれば軟禁状態、あるいは指名手配のようなことでしょうか。その割にはかなり自由に活動（暗躍）できていたように思えるのですが。またそうした点を含めて、五卿と太宰府との関係について注目すべき点があれば教えてください。

A/ 回答

五卿の立ち位置は、その当時の政局、彼らをめぐる政治状況で変化しています。

五卿の西遷の当初は、第一次長州征伐の講和条件・長州処分としての長州から筑前への移転であり、また史料には「五人衆」などの呼称も見られ、政治犯・左遷的な位置づけで護送、福岡藩・佐賀藩・久留米藩・肥後藩・薩摩藩の五藩藩士によって警衛され、太宰府天満宮の宿坊に軟禁状態でした。福岡藩も長州藩・尊王攘夷派の志士とつながりが深かった五卿との関りを幕府に「長州同気」「尊王攘夷派」と見なされるのを恐れ警戒し、対応に苦慮していました。そして、江戸幕府は、目付を派遣し、五卿の引き渡しを要求、五卿と尊王攘夷派志士との接触を防ぎ、五卿を奪還し、大坂や江戸で監禁したい意向を持っていたようです。しかし、慶応二年頃から薩摩藩の国事周旋により、黒田嘉右衛門や大山格之助ら薩摩藩士の「宰府応接方」や警衛兵が幕府目付を大砲で威嚇し追い返し、京都でも大久保利通や小松帯刀らが幕府老中を詰問するなど周旋して、政治情勢が薩摩藩や五卿有利に変わり、五卿の待遇も土方久元や水野正名ら五卿の随従者や薩摩藩の周旋・応接、太宰府天満宮の社家や地元有力者・名望家の尽力により改善され、五卿も帰洛・復位、政治復帰の運びとなります。

また五卿と太宰府との関係で注目すべき点は、五卿と太宰府天満宮の社家との関係です。五卿・三条実美は太宰府天満宮の第35代別当、大鳥居信全とは親戚（三条実美の父三条実万と従兄弟）であり、大鳥居信全の歌道の師匠は五卿・三条西季知でもあり、関係がありました。また、五卿とも関係の深かった久留米藩、水天宮神官の真木和泉の弟が太宰府天満宮の社家（文人）の小野加賀家の小野氏伸であり、小野氏伸は、子の小野隆助と共に五卿の周旋・応接に尽力しています。筑紫万葉の文化と五卿の和歌なども、今後の調査・研究課題です。

Q/ 五卿が太宰府に遷座した理由は何でしょうか？

A/ 回答

「五卿の西遷と太宰府」の関係、「五卿の遷座の地が何故太宰府なのか」という点は、当時の政治状況と様々な政治的要因がありますが、1つの根拠として、古都太宰府としての歴史文化の伝統、古都・西の都の面影を残す太宰府天満宮など「土地の風

韻」があげられます。水野正名ら随従者を事前に太宰府に視察・検分に派遣し、「土地ノ風韻ヲ有シ、高貴ノ閑居ニ適セリ」（『七卿西竄始末』第5巻）という報告を受け五卿も賛同し、「遠の朝廷や筑紫大宰、西都」とも呼ばれた「古都太宰府」、太宰府天満宮に五卿の移転が正式に決定した経緯があります。

※ ご質問ありがとうございました。